

「廣瀬さんとの旅行」

玉井哲雄

長期海外出張でロンドンに2ヵ月半滞在した後、さらに2ヵ月半の予定でミラノにいる時に、この追悼文集の案内が電子メールで届いた。ゆくりなくも、1980年に廣瀬さんと似たようなコースの海外出張をしたことを思い起こした。そのときもまずロンドンに行き、その後パリを経てイタリアのピサに入り、さらにローマを経て米国にまで出かけたのである。

廣瀬さんの思い出は、どうしても酒と旅につながる。もちろん真面目ななんとか委員会で、こちらはご意見を給わるという立場で同席したことも度々あったはずだが、そのような記憶は薄れがちである。一緒に旅に出るは精力的に見てまわり、旨いものを探し、酒を呑んだ。最初の大旅行は1977年11月のソフトウェア工学研究状況の視察調査だった。このときは大きな視察団だったが、その中で廣瀬さんと、土居範久さん、吉村鐵太郎さん、そして筆者はとくに行動を共にし、後に4人組と称された。このときも、米国とヨーロッパを回る世界一周の旅だったが、この4人組の顛末記を書き出すときりが無い。ただ、帰国後の次の出来事は、とくに印象的なので書いておきたい。

出張の清算などの後処理の相談で、廣瀬さんを早稲田大学に訪れた時のことである。多分、同じ年の12月か翌年の1月だったろう。打ち合わせがすんで、一杯やろうということになり、廣瀬さんに池袋の笹周に連れていってもらった。このように気軽に若輩者を誘うのも、廣瀬さんならではのといえるだろう。実は、笹周にはその3・4年前、会社の先輩と一度だけ行ったことがあった。しかし、この廣瀬さんとの同行が、その後の笹周や笹舟会との付き合いの始まりだろう。このとき、笹周の若旦那が（当時は本当に若かったろう）、「例の刀が届いています」といって持ってきた。なんでも昔の「包丁正宗」という包丁の形をした名刀を現代に復活させるという刀鍛冶の試みに、廣瀬さんたちが出資したということのようで、鍛冶の方ではあまりうまくできなかったというコメントがあったと記憶している。廣瀬さんはその場で大枚をはたいて（という気がするが、実際に現金を持ち合わせていたのかどうかは記憶が怪しい）、それを引き取った。笹周の囲炉裏に炭が燃えている背景でのこの刀のやりとりは、鮮明な視覚シーンとして頭に焼き付いている。

さて、1980年の旅行もやはり11月であった。手元に当時の旅程が残っている。ロンドンに着いたのが11月2日の朝5時過ぎである。当時はアンカレッジ経由で、成田を出てから17時間ぐらいかかっている。ホテルはケンジントン地区で、奇しくも今回私が滞在していたインペリアル・カレッジに近い。ホテルに入ってひと眠り、などするわけがなく、すぐにロンドンを歩こうということになった。このとき、廣瀬さんと私のほかに、この調査の事務局役の半官半民会社から来ているA氏も一緒だった。彼は海外旅行は初めてで、事務

局として世話をやくというよりただただわれわれについてくる、というタイプの人だった。ホテルにあった簡単な地図を頼りに歩き始めたが、その地図ではホテルは西の端のさらに外で載っていない。そこから歩いてなんと東のはずれのタワーブリッジまで行ってしまった。当時は、ロンドンとは狭いものだという感想を持ったが、今考えれば徹夜で飛行機に乗ってきてよくまあそんなに歩いたものだと思う。ついてきた A 氏にとってはとんだ災難であったかもしれない。

翌日はケンブリッジ大学を訪れ、LISP や数式処理用言語の処理系を開発している研究者たちに会った。その訪問のメモも残っているが、それを紹介するのはこの文章にそぐわないだろう。ただ天気は素晴らしくよい日でケンブリッジの木々や芝生や川が美しかったこと、訪ねていった人がカレッジをいろいろ案内してくれて、あれがニュートンのいた部屋だと、その時点でも学生に使われている部屋を指して言ったので驚いたこと、などが記憶にある。

11 月 4 日にロンドンからパリに行き、翌日、IRIA という研究所（現在は INRIA）を訪問した。行ったのは午前中だが、昼食時になって敷地内にあるレストランに招待され、われわれが訪問したのをいいことに、向こうの研究者たちがワインを盛んに飲んで、もちろん廣瀬さんも私も大いに付き合った。しかし、その後とくに予定のないわれわれはともかく、彼らは午後仕事ができるのだろうかと思ったものである。

次にパリからイタリアのピサに行き、ピサ大学を訪問した。今回、24 年ぶりにピサを訪れて、廣瀬さんとともに来た時のことを懐かしく思い出した。そのとき会った Carlo Montangero などがまだ教授としていたのである。そのときはもちろん斜塔に廣瀬さんと登った。各階の周囲になんの防護柵もないことに二人で驚いて、会話を交わしたことが思い起こされる。

ピサ大学の連中に次はローマに行くといったら、ここまで来てフィレンツェに寄らない法はないと言われ、かれらがフィレンツェのホテルを半ば強引に予約してくれた。今回フィレンツェにも行って判ったが、そのときのホテルはエクセルシオールというまるで美術館みたいなホテルで、現在でも超高級ホテルとして営業している。しかし、1980 年の時はピサ大学の人の手配で、特別安くしてもらったような気がする。

フィレンツェからローマまでは、当時の汽車で 5 時間ぐらいかかった。昼食時になったので廣瀬さんと A 氏と食堂車へ行った。テーブルが一杯だったので空くのを待った。しかし待てど暮らせど空かない。それで判ったが、イタリアの汽車では客を入れ替えるという発想がないのである。最初に座った客が前菜から第 1 の皿から第 2 の皿、そしてデザートを食べ終わると、そのテーブルは終了する。待っても甲斐がないことがようやくわかった。

それで廣瀬さんと A 氏と 3 人ですごすごと席に戻った。

その汽車がローマのテルミニ駅に着いたら、周りにいるイタリア人の乗客たちが興奮してしゃべりあっている。何事かと思って私の目の前にいた若くて美しい女性（彼女とはそれまでもいろいろ話をしていた）に聞いたら、なんと汽車が時刻表どおりに着いたので騒いでいるのであった。

今度もローマに行って、やはり昔、廣瀬さんとあちこち歩き回ったことを思い出した。記憶は断片的だが、バチカンにもスペイン広場にもコロセウムにも行った。どこかでタクシーを拾ってトレビの泉に行こうということになり、廣瀬さんが「トレビ、トレビ」といっても運転手に通じない。私はイタリア語はまったくの無知だったが巻き舌は得意だったので「トゥレーーヴィ」といったら一発で通じた。

そしてローマからボストンに向かったのだが、それが大変だった。飛行機はアリタリアだった。イタリアは汽車だけでなく航空便も時間にきちょうめんとはいいがたい。このときも確か、12 時間ぐらい遅れたのである。その間、廣瀬さんと A 氏と 3 人は、待ちくたびれて思い思いの場所に散っていた。途中で放送があり、ニューヨーク行きがあるがそれに乗り換える人は申し出てほしい、ニューヨークからボストンまではシャトルに接続する、ということだった。私はこれに乗り換えるのがよいのではないかと思い、2 人を探すとすぐに廣瀬さんは見つかったが、A 氏が捕まらない。それでニューヨーク便への乗り換えの機会をみすみす逃すこととなった。その後、A 氏が見つかった時、それまでも彼の行動にかなりいらいらしていた私は、つい非難するような言葉を口にした。そのとき廣瀬さんが諭されたことが忘れられない。正確な言葉は覚えていない。しかし、単に「そういうことをいうもんじゃない」というようなストレートな言い方ではなく、私の気持ちにも配慮しながら A 氏への思いやりのある言葉だった。廣瀬さんは見かけは豪放磊落だが、非常に優しくまた細かく気を配る人だったとつくづく思う。

ところが話はこれで終わらない。12 時間遅れでボストンに着き、手荷物受け取りで待ったが、われわれの荷物はいつまで待っても出てこない。それで関係者に聞くと、こちらが手を挙げなかったにもかかわらず、われわれの荷物は勝手にニューヨーク便に乗せられ、そこで降ろされているという事実が判明した。しかもニューヨークで税関検査を受ける必要があり、それを通らないとボストンに送れないという。カバンの鍵を勝手に開けるということだが、了承せざるをえない。それで廣瀬さんと私のカバンは、次の目的地フィラデルフィアで 2 日後にようやく手に入った。気の毒だったのは A 氏である。初めての海外旅行で新たに買ったカバンには最新の電子錠がついていて、税関で開けることができない。この後、米国には 10 日ほど滞在し、東海岸から西海岸まで回ったのだが、彼のカバンが手元

に帰ってきたのは、帰国直前のサンフランシスコにおいてであった。

廣瀬さんが亡くなって 10 周年という時に、たまたまイタリアにいたのもなにかの因縁と、24 年前の旅行の話を長々書いたが、廣瀬さんの人間味の豊かさには、旅行の先々でも東京においてでも、折にふれて感じ入ったものである。そしてまた忘れられないのが「なにを食ったらうまかった」とか「なにを吞んだらうまかった」という話が実に上手なことで、聞いているこちらもなにかなんでもそれを食べたり吞んだりしたくなる。その上、実際によいものを食べたり吞んだりする時のうまそうな表情としぐさ、あれだけは他人の追隨を許さないと今でもつくづく思う。